

ドキュメンタリー映画『NAGASHIMA ～かくりの証言～』

“いまでも背中に平仮名で「かくり」と貼られているよう”
“長島しか知りません” “療養所なのに監房が” “獄死も”
無名のハンセン病の元患者たちが封印してきた

『強制隔離』の体験を初めて語った。
木の入園番号札を見せながら。

“家族に迷惑が掛かるから”と誰にも話さなかった元患者たち。
40年間、通い続けた宮崎賢監督にだからこそ語った人間の叫び。
”もう時間がありません、なにがあったか、知っていて欲しい！”と。

断種手術、墮胎児の保存、解剖、草津の重監房送り、無らい県運動、6畳間に二組夫婦の生活。村八分の葬儀、故郷への墓参、などなど。

温かな目線のドキュメンタリーカメラマンとして知られ、ハンセン病隔離報道の第一人者の宮崎監督自らが企画しインタビュー、構成、撮影、編集を手がけた。

その問いかけは私たちをざわつかさずには置かない。

瀬戸内海に浮かぶ岡山県の長島愛生園には納骨堂がある。小さな骨壺に眠る3700柱の思い。偏見、差別のなかで人生のほとんどを隔絶の島に暮らし生涯を閉じた人たち。2020年で、日本最初の国立ハンセン病療養所・長島愛生園が置かれてから90年になった。赤裸々な元患者たちの証言もやがて聞けなくなる日が来る。

ジャーナリスト 曾根 英二（菊地 寛賞受賞）